

日曜の朝、湖のほとりまで

葉月蘭

余呉湖のそばで育った僕にとつて

この湖は体の一部みたいなものなんだ

僕は村上サトル、高校三年生。余呉湖に近い下余呉に生まれ育った。ものごころついたころから、この小さな湖の四季の移ろいを見てきた僕にとつて、余呉湖のほとりは、どこよりも心の休まるサンクチュアリになってしまった。

特に僕が湖の周辺の花や虫、鳥たちに興味を持つようになったのは、自然観察指導者でもある父の影響をかなり受けている。

中学校で理科を教える父は、子どもが言うのもなんだけど、かなりな熱血漢で、疑問があれば放っておけない研究熱心な人だ。それに、世話好きな性格ときているから、いろんな人から受けた相談に一生懸命応えたりで、いつも忙しそうだ。

そんな父に連れられて、僕はよく余呉湖にきた。十年くらい前までのことしか思い出せないけれど、その頃の余呉湖は、もともと水が透明だったと思う。今はすぐ足元の湖底しか

見えない。夏も冬も鉛色した余呉湖は、びわ湖の南部の方と同じくらい汚れているらしい。

五人の仲間と続けた水鳥の観察は

二百五十回以上にもなるよ

平成元年、鏡岡中学の一年生だった僕は、友人のユウキ、アツシといっしょに、湖北野鳥センター（東浅井郡湖北町）の青少年科学教室に参加し、水鳥観察の指導を受けた。それまであやふやだった識別ができるようになって水鳥に親しみを覚えた僕たちは、余呉湖にやってくる水鳥の観察を思い立った。次の年には、一学年下のヨットモクン、テッチャン、馬場チャンが加わり、六人で調査を進めていくことになった。

毎週日曜日の朝、五人は僕の家に集まり、そろって余呉湖へ向かった。天気の良い日はさつさと出発できるけど、雨や風、雪の日なんかは、出かけるのがおっくうになってしまふものだ。「これが終わったら行こう」とテレビを見ている僕たちの頭上に、父の声が飛



んでくることもあった。

「サトル、早よ行かんとかかんゾ……！」
「そういう天気悪い日は、湖を一周するにも時間がかかる。誰も口には出さなかったけれど、「なんでこんなこと始めたんやろ……」なんて気持ちになったことも、一度や二度でない。こんなこと、今だから言えるんだけどね。」

最初のうちはこれといった目的もなく、湖を一周しながら定点観測を続けていた僕たちだったが、そのうちに、水鳥の生活について知りたいことが絞れてきた。

1 余呉湖にはどんな種類の水鳥がやってくるんだろう。

2 年や月によって水鳥の数はどう変わるんだろう。

3 どの辺りにどんな鳥がいるんだろう。

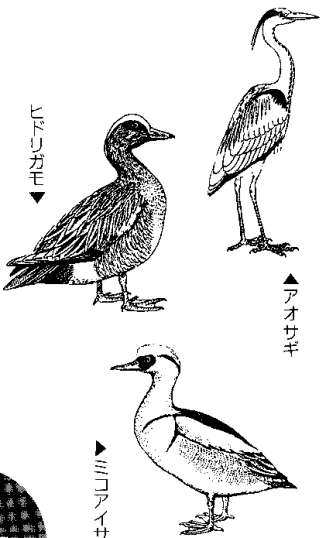
4 どうしてやってくる水鳥が変わるんだろう。

それからのボクたちの足取りは、前よりもずいぶん軽くなったような気がする。

思いがけない鳥との出会いが、僕たちを

ここまで連れてきてくれたのかもしれない

余呉湖には約三千種類の水鳥が飛来している。なかでもダントツに多いのはマガモだ。十月から三月にかけて、その数は全体の半分から四分の三ほどにもなる。ほかにも多く見られる鳥は、ヒドリガモ、カンムリカイツブリ、カルガモ、コガモなどだ。観察を始めてから個体数が増えている鳥は、ゴイスギ、コガモ、オナガガモなど。反対に、六年前には



▲アオサギ

▼ミコアイサ

ヒドリガモ

そういえば、五年間にわずか数回だけお目にかかれたという希な鳥もある。カワセミ、ダイサギ、トモエガモ、ハシビロガモ、スズガモなどがそうだ。こういう普段見慣れない鳥は、識別が難しい。かわりばんこにフィールドスコープを覗き、大慌てで図鑑をめくる名前が確認できたときは、思わずガッツポーズものだ。

特に、マンネリと怠惰の風が六人の間に漂いかけたときにそういう出会いがあると、僕らは心の底からうれしくなった。

観察のデータが本にまとまるなんて

思いがけない夢の実現だった

そんなこんなで続けてきた観察だったが、僕たちが受験を控えた三年生になる頃には、二年生も部活が忙しくなったりして、続けていくのが難しいことがはつきりしてきた。昨年三月、冬鳥たちが北へ帰っていくのを見送った僕たちは、観察を打ち切ることを決めた。長いような、短いような五年間だった。

五年の間には、学生科学展で最優秀賞や読売新聞社賞などを受賞し、研究を認めてもらえたうれしさも味わった。このたくさんたまったデータを、何かの形にして残したいという気持ちで僕らの間にムクムクとわいてきたとき、「びわさん緑と水の基金」に応募してはどうかと父が提案した。

「これに応募してみようやないか」

「ぜったい認めてもらえるって」

「その助成金で本をつくらう」

「コンピュータを使ってグラフや表もつくれるしな」

みんなの目は、最近父が導入したばかりの新しいパソコンに注がれた。これなら、カメラグラフもパッチリ印刷できる。次の目標

余呉湖

ワカサギの巻

曇った早朝がチャンスなんっスよ

冬から早春にかけての余呉湖は、ワカサギ釣りの穴場になる。自然や歴史方面から余呉湖を攻めるのもいいが、釣りも欠かせない魅力のひとつなのだ。そこで長浜みーなのあやしい取材班は、初春のある日曜日、ワカサギ釣りに挑戦することになった。

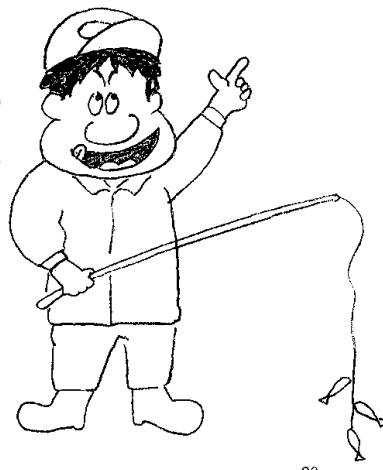
取材班のなかには、釣りを得意にする者がいないため、外部から講師をお迎えすることになった。釣りバカ人生一筋十年という長谷川伝助師匠である。生徒は、師匠の職場の同僚三人、それ



▲入場料を払って釣棧橋へ

にあやしい取材班を代表して、中年ナチュラリストの西山昇が参加することになった。朝七時半、余呉湖ビジターセンターの駐車場に着く。初春の空はまだほの暗い。昨夜の

天気予報では、近畿地方全般に晴の予報だったが、お天と様は雲のなかだ。余呉湖から立ちのぼる霧で、対岸の山や集落が見え隠れしている。一週間前に降った雪が、あたり一面をモノトール



「こういう日がチャンスなんっスよ」
駐車場に降り立った師匠が、防寒コートを着ながら声を弾ませた。

「エッほんどですか、ハセちゃん」
「俺のカンに狂いはないっスよ、フーさん」
釣り竿を持つと、なぜか人々は「釣りバカ日誌」のハマちゃんのスーさんの漫画的会話に変化するのである。

ちよっと来るのが遅すぎたかな

師匠と生徒は、釣り道具やおりたたみイス、デイバックなどを持って、釣り棧橋に向かった。棧橋の入口に余呉湖漁業管理組合の小さな管理棟がある。ここで、遊漁料金と釣棧橋入場料を払う。しめて千三百円だ。ここではエサも売っているし、貸し竿もある。手ぶらで来て、楽しめるわけだ。

「今年はどうですか」

西山が、管理棟にいる受付のオッサンに聞いた。

「雪が降ってから、釣れるようになった。休みの日は、二、三百人はあるな。名古屋や京都方面からも、ぎょうさん来やするで」

「ちよっと来るのが遅すぎたかな」

師匠がつぶやいた。棧橋の先には、口の字型に組んだ二つの釣り場が繋がっている。両方の釣り場には、すでに五十人ほどの人たちが釣り糸を垂れている。

「奥の釣り場がいちばんなんですけどね」

師匠が釣り場を探すが、奥の二等地に割り込む余裕はなさそうだ。仕方なく、手前の釣り場に空きスペースを見つける。



▲長谷川師匠は余裕の笑顔で派釣り

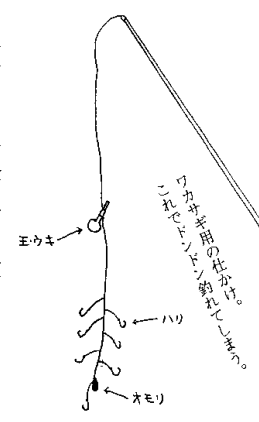
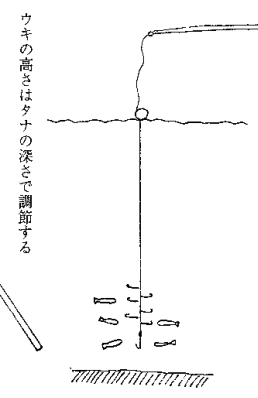
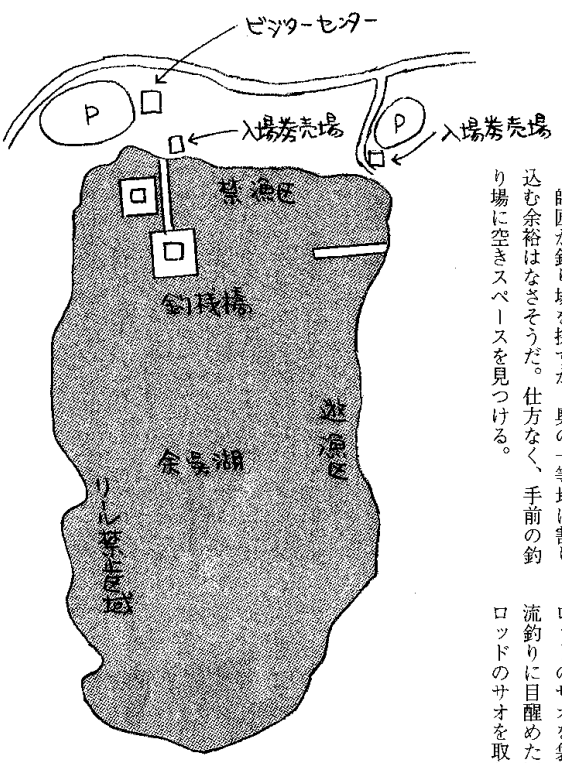
空いた釣り場におりたたみイスやデーバックを降ろすと、師匠は、おもむろにカーボンロッドのサオを袋から取り出した。最近、溪流釣りに目醒めた同僚のフーさんは、グラスロッドのサオを取り出した。西山昇は、小学生のころ使った四段つなぎの竹サオを取り出す。

小学校のJUNO

竹サオにシンミロ

「ワサギ追いし、かの山あし、コバナ釣りし、かの川あし……」

西山おとつあんは、竹サオを握りしめながら、遠い夏の日の釣り遊びを思い出した。もう三十年以上も前の話だ。長浜城の内堀が残っていたころ、



長浜港は旧長浜駅舎鉄道資料館の西側にあった。踏み切りを渡ると、突き当たりが棧橋になっていた。棧橋には、ときどき小さな遊覧船が停泊していたように思う。釣りガキたちは、その棧橋のうえで釣り糸を垂らし、ボテやモロコを釣った。エサはミミズだった。港の西側一帯は、一面の桑畑になっていた。ミミズは、桑畑の土を掘るといくらでも採れた。お小遣いをもらえる子は、ミミズの代わりに紅サシを買っていた。舟板解と踏み切りのあいだに、釣り道具屋が一軒あって、ここで釣り糸やエサを売っていたのだ。そのころ、竹サオはマダケの枝をそのまま使ったものだった。